一 武州荏原郡、村名七郷方、日用穢物
とゝのゝ有り、其後、村内を始め、近
年、次第に穢敷事多く、去る亥年、
小金町金子亦左衛門、新田を拵、
又也とゝのゝ古金子とゝり、松戸宿の時、
に、自然、其事、詳、知りしが、亥年、北条
十郎左衛門一人、此事、而已、又也、
なるべし、其時、所々、行用、成、
ゝ、今、

大槻文庫
洋学文庫
文庫8
A185

小金町金右衛門と相撲取日向嶽稲荷へ参詣入
りて帰る仲人誘引流れ中仲絶しば
此節てい不審所上下方相撲方若して来
合中せしうぶ下方に行方とそこ方手伝と
てうろうろいう者共中に若しば帯こそ
う者とて帯を人数をもつて彼方のものの相撲を見
せの度間しまり如此門前まるれあるこれとう見
給中手拭人に内ら入舞踊曽姉手
大皆手踊礼屋敷相撲見物成冥き川を新

のうを夜とはケのうをうだをみるに相撲と異
しく看板に川ふ一流連絶ありしうち
興舞に百男ちゆかの代の汐を世話方を賑
北安一人に西隆に座小金町主人宿に
稲荷の安と信代の光の義去よりくると菊七郎
の組母のこ家ありしこ人の男油揚屋七郎
相撲うろ内をのそきしを見い自ら
うう不人の妻と分迎家内のうち天下寿
しと知信代男れ義去に行しこ方

ぞと爰にハ稲荷様へ参詣しおきしれ
りける時祖母の中より稲荷様ハさうして此玄
の中へと教へしかば彼ノ男御揚をよくして洗
浄稲荷様此前へ祈りしに祖母ハ彼より叶ひ
くれし小袖から花を取して御揚を備へ念ん
顔ハ金幣を尊礼も直熟拝て花を戴頭を
此ハ御礼の妻より其用ゐも結参匿り旅ぞ
ニつとれとる参らず手伏して拝し御ゆ祖母
いまをよりしにかうするうらうらさんなりけるのしや世

と此猫の女に此方てあの男ハ又七とて小金町
辺りの金子あつまる故此事に松元の旅や
康を云御ム居りしものにて素所西重旅の
うちの和も縁ね元里ハ三年半文のかのこハ千股あれ
よりあるる御居りぬ一寿しぬ小金町金子
有田苗新しせのるあるかしが其ならくろてハ何ぞ
をそらし事に為まじや居こしける七之頃前に
急く稲荷此前を投を寄りし其身ずする
事あ聴しぬ事みしが十七の頻倒のごとく

[illegible]

一 [illegible]

始はじめて

始めのうちは大きなる蛇のうねりしら波のごとくなりて形も
同じうして活怪異なれども人と形とをしらべあいなりしかども
てをとりあげ寄せしかばなりとつくづくとをしらべし大驚きて
とくとくと中今七寸寄せ一枚ずつとつくづくとをしらべ
ると始めて驚し逃去りぬ京の下口なる弦を建ち寄人く
寄寄せるとくとくとあるべし通寄るとそうつかたくなりや新年
始めはのいそうも同じ様なりてやうもそくとの通去るなり
くしてそなたらもとおとしとして数立人あるなりとせんと一日
二度の寄くそしてかるるふあるをあちこちとうけなりしなる
して皆他くなりサク新いそくべかをそなりやそくあるとと

をしと又いそうも始めるそくをとを大仏をとに格堂十文字にてあり
と姫を抱き丈夫を剛毛寄せ寄を建てと人と形しふそをいと
通寄るふ姫とあしもくるうし事をくいのく新ろうべく
あだをとさうべきやと家内のすの手体寄寄うはをうし
実的さをを帰うべ陳あるいなるるはと人と寄集り
しうきをとをはかりしいあるうと新しふちう沙弥尚
歩新せしとしてふあをと寄つはきべ寄体ふうりぬとうふ
宿一うくせしふ二階うりうとをうげ寄しこうるやくみを
ちをふつうを寄りしと寄いを特さを寄門一丈寄ををくふ氏
うかのそばく二男をを寄せべ寄しれいそうも通上吐とい新

代八ツ時民ども へくの四種いかも云るとをきうぬうして我る
事ををさまりをき居るとそ百人も庭掃除或ハ子せば
とても見ぬをし上いいろくく事うとも云ふこい事ハ
百生ハ如常とあるこぬ所り矢張芸場ハ変やすし
扨しも前原三郎兵衛八月初旬ハこも水を九る我ハ
陳情の為村ハ出張せしに強盗の為し国収を為替海
百人ハ所ハ百姓ハ百遠をるきうこと
百人以上ハ手生 言を伝て酷とをしく来左むに平くと
人ををて手をハう手をハう手をを為ふ為ふと云酷酷と
為ハも国郡ハ百人ハ百姓ハ百村せしを云陳情
ハハ百姓ハ百村ハ百姓ハ百村ハ百姓ハ百村ハ百姓

一ハ百生ハ関新田ハ百ハ郡ハ百村ハ百姓ハ百村ハ百姓ハ百村ハ百姓
百年ハ百ハ三十二戸ハ百ハ百村ハ百姓ハ百村ハ百姓ハ百村ハ百姓
百生ハ為ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ
百姓ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ
少新郡ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ
郡田の三百人ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ
為人ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ
郡ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ百ハ

此彌十無験のうちて一萬人の時ハ口をとぢしとて
小さき申しぞ病平ぬ節ハ平人のことしとよ子
御若き十の気乃治て来見りと申せど戸を閉め
其所の男を引入たりと思ひ戸をとざし入られ
四尾大て様を去る名医ら尋ケしらバ其人とも存寄
古師の気お若ら当歳中積し陰三ちしふ尾に気わ
服を止代無益ハ其人も気見て居能けれども
此時は国り此新理不尽の事またしうへ迷惑に存
御堂事当座て御見られお気ぬ人々も治まる話
し而会を垂し　此華村内中大己も理不尽之経験し

中ら我打入て饒游しとりよ今宵形ハ病事此
君きるべく尾の出して怪我をのと見りしる此
何うりと以て御座お詫をかけし我ら女の男来り治
まり来りしとりよ若き人来りぜず人そぬわし
と申し気を見て来りしが君ハ千偏尾をこうし
未来此様我としが尾の男かしも病なく来りて
後りくおしや行方を失ひしと又ハ気りぬ男
来り治病所中ならぬと申せしがすぐりて居り
し男立て知るらひの大きさみ胴りりみ付しふ
尾は志追手立てすりせしとて怪我するのと見りしる

当〇辺九戸郡[illegible]
遠い陸奥ノ和のそばのこと[illegible]
[illegible]村同様の[illegible]
[illegible]人[illegible]と同様
中略

一[illegible]年九月[illegible]村[illegible]川隆院門通[illegible]
[illegible]
[illegible]
の上に粮[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

家又は蔵共ら夫を背負の長く刺なるどに山盛なる
姫の見る稲掴みへて小のものゝ一四ツ掴ひ又へ出ある
前ゝ松茸の上にたゝ蛇苞しらゝ人を驚く姫笑
く掴ゝりとしまゝ又ゝ蛇苞に沈を時ゝと
掴ゝりて本々前逃ぬ後者ゝ掴ひ出ひ前者
場ゝ行ゝ所ゝと先ゝ又ゝ挽ゝ前中を出ひ寸ゝと
出ゝ姫ひ見ゝ稲挽ゝ寸を先ゝ寸ゝ寸ゝ
掴ゝ寸ゝ人ゝて四寸掴ゝ寸を入前ゝ寸を結ゝ寸
秋中ゝ意ひ出ゝ寸ゝ前ゝ寸ゝ寸ゝ
ゝ寸ゝ出ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ

ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ
稲ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ
海ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ
ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ
前ゝ人ゝ寸ゝ姫ゝ前ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ
ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ
前ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ
稲前ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ
関ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ寸ゝ

一ホウ天王ニ六月十九日ニ出来ル所ノ人氏
人々ヤ毎年社番ニ伺ヘルト今年ニ初年
番ニ来ル人ハ東ハ立部中村ニ所ノ住人
伺ヘルト云事ハ中ノ伺ヘルトイフ事ハ
ニ月ニ平沢村ニ伺ヘル村ニ毎年ニ所ノ
此ハ社番ニ稲ヲ六ツ穂ヲ伺ヘルトイフ他ノ所ノ
ニ中村ニ此ヲ中ノ中ノトモ